

- コメントの追加 [na4]: 本来数字は漢数字を使用するのが原則ですが、カウントダウンの場合はアラビア数字の方が合うでしょう。
- コメントの追加 [na6]: なにを指しているのかわかりにくい。「上からの命令」など書くのがよいでしょう。
- コメントの追加 [na1]: なにを指しているのかややわかりにくい。「無機質」を表現する別の言葉を入れましょう。例: 冷やかかさ
- コメントの追加 [na7]: 現在進行形なので「いる」にしましょう。
- コメントの追加 [na2]: 残したということでしょうか？
- コメントの追加 [na3]: 壁にどのようにして隠れるのでしょうか？ 電柱の陰など、物陰に隠れるのが適切かと思います。
- コメントの追加 [na5]: 増井がなぜ狙われているのか、アキにまで情報は降りてこないと思いますが、彼女が知っている範囲の増井の情報を入れたいです。読者に彼がどんな人間か理解してもらうためです。

応用編課題⑩

【名前…】

これまでの文章・描写についての講義を意識しつつ、2000文字程度の文章を書きましよう。
 シチュエーション 「人混みでターゲットを追う↓人気のないところで言葉を交わす↓バトル(冒頭だけでも)」

『ターゲット、北西へ移動中。暫く泳がせろ』
 人間とは思えない無機質な声がイヤホンに流れる。ガラス張りのビルしか見えないオフィス街がそれをより一層強調させた。
 「了解。接触のタイミングは？」
 『こちらで指示を出す。ナンバー9は狙撃ポイントへ移動した』
 「ラジャー」
 プツ、と無線が切れる。アキは飲んでいたコーヒをそのままに、カフェから出た。時刻は昼時を迎え、ビルからはスーツ姿のサラリーマンたちや、財布片手に雑談をするOLたちが出てきた。ランチにするには絶好の快晴だから、そうするのも頷ける。けれどアキのポケットには財布ではなく、小さなナイフが入っていた。頸動脈を斬るには充分すぎるくらいのものだ。
 T字路の手前までくると、アキは右側の壁に隠れるようにして潜む。そして心の中でカウントをとる。
 (三、二、一……)
 カウントが終わった途端、右側の道から人影が現れる。それがターゲットの増井であると分かると、アキはよしと頷き、気づかれないようにその後を追った。
 ここまでは全て上の指示だ。合流場所も、増井が通るルートも上が調べてくれたもの。アキはそれをこなす駒でしかない。
 けれど親に捨てられ、居場所を無くした自分にとってはたった一つの居場所だ。どんな汚れ仕事でも、嫌な顔ひとつせず自分がいた場所。
 けれど時折、それが虚しく感じることもある。それが何なのか分からない。
 (いけない、いけない)
 危うく集中が途切れるところだった。アキは真正面に視線を戻す。変わらず増井はアキの前を歩いていった。

コメントの追加 [na9]: 高校生と限定する必要もないので取っていいでしょう。

コメントの追加 [na8]: 増井の異常さが垣間見える良い表現です。

(このまま作戦通りなら、真っ直ぐ行くはず)
その先で増井はナンバー9に撃たれて死ぬ。その手はずだ。無反応なイヤホンがそれを教えていた。

すると前から学生だろうか、スポーツウエアを着た集団が走ってきた。エイ、オー、エイ、オーと掛け声が迫る。

アキは特に気にすることなく、前に行く増田に視線を置いていた。

だからこそ油断したのだ。突拍子な行動に出る筈もない、と。

学生たちが横を通り過ぎていく直前、増田がこちらを向いた。

「まだまだだね」

「！」

咄嗟のことに頭が追いつかない。追跡されている側のターゲットが、こちらを向いた。それも余裕のある笑みを浮かべて。

すると増田はふっと道から外れ、学生たちの集団に横から入った。そして、奥にある路地裏へと姿を消した。

「なっ……！！」

軽やかな身のこなしに一切の無駄がない。そして何より学生たちは何故か増田の存在に気づいていなかった。そのままランニングを続けて去っていく。

「待て！」

誰もいない路地裏へとアキは入る。走りながら無線機に向かって叫んだ。

「トラブル発生！ ターゲットに気づかれた！」

『何だ?!』

「原因は不明！ これより後を追う！」

無線機からは退避命令が出されるが、それに従う気にはなれない。仮にこれがアキの起こしたことなら、それなりの責任を取らなければ腹の虫が収まらないというものだ。

湿ったカビだらけの路地裏を右へ、左へと走る。痕跡などない。だから見つかるのかさえ問題だったが、その心配はなかった。

増田はいくつか曲がり角を過ぎた行き止まりで待機していた。アキが追い付くと嬉しそうに笑い、大げさに手を振った。

「やあ、早かったね。もう少し迷うんじゃないかと思ってた」

久しぶりに会う高校の同級生のような感覚で増田は話しかけてくる。アキはそれには答えず、代わりに鋭い目つきで返した。

「おお、こわ。女の子はいつだって強いなあ」

「何のつもりだ」

増田はふふんと鼻を鳴らしただけで、アキの問いには答えない。答えるつもりもなさそうだ。

「ここじゃ何だし、どうだい？ お茶でも。クリームタルトが美味しい店を知っているし」

その返答よりも先に、アキの体が動く。腰を低くし、増田の懐へと入った。

瞬時に両手を出し、左手で増田の服を掴む。ただのTシャツだったお陰で掴みやすい。そして、アキは持っていたナイフを右手に持つ。後はこれを体に突き刺せば――。

「おっと。それはダメだな」

だがナイフは増田のわき腹に入る直前で止まる。増田が左の手でがっちりとおアキの右腕を掴んだからだ。

「ぐっ」

「動かないで。折るよ」

人間とは思えない怪力で増田はアキの腕をねじろうとする。筋が音を立てたような気がして、大人しくアキは項垂れるしかなかった。

「活発すぎるのも難題だね。君、モテないだろ？」

「それは私に関係することじゃない」

両者一步も譲らず、そのままの体勢で話を続ける。声のトーンも荒ぶることなく、淡々と進んでいく会話。些か妙ではあるが、二人の空間ではそれが普通のようにも見える。

「女の子がそんな口調しないでよ」

「貴様がその減らず口を閉じれば考えてやらんでもないがな」

瞳孔を目一杯に開き、アキは悪態をついた。